

第2章

自然が創り、 人が造ったなごや

歴史編

自然が創り、
人が変えてきたなごや

猪子石の丘陵地(宮根の山)

昭和35年

(千種区千代が丘付近)

平成21年

(宮根台付近)



出典：目で見える千種・名東の100年((株)郷土出版社、1991年)



出典：目で見える千種・名東の100年((株)郷土出版社、1991年)

名東区上社周辺の田園風景

昭和35年

(神蔵寺から北東方向)

平成21年

(神蔵寺から北東方向)



なごやの地形は、人類が誕生するはるか昔から続く地形の形成作用によって、大きく3つ（西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地）にわけられます。

自然の力が創りあげた地形や地質、水の流れに合わせて、なごやに固有の生きものたちが育まれていきました。

縄文時代、台地の上に集落を形成し始めた人々は、時代の経過とともに、3つの地形に暮らしを広げていきました。およそ100年前までは、それぞれの地形や風土に合わせた暮らしが営まれていました。

明治時代を迎え、本格的な近代化が始まると、なごやは商工業都市として順調に発展していきました。人口は増加し、市街地が拡大していきました。

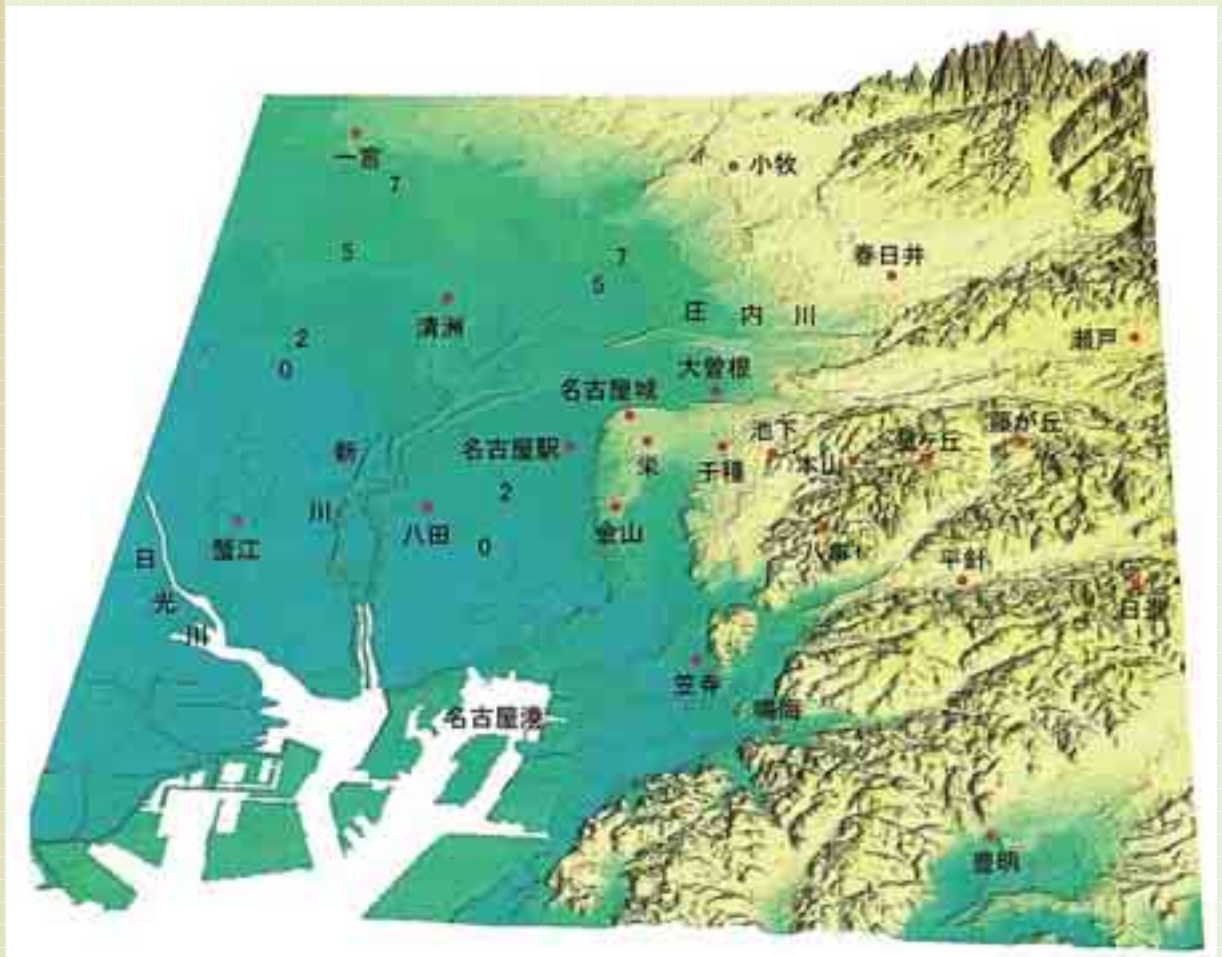
その一方で、生きもののすみかは減少し、人々の暮らしも海外に依存した大量生産・大量消費の暮らしに変わっていきました。

(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

自然の摂理がなごやの大地を創り、 生きものを育んだ

生きものを育む基礎となるのが、地形と水です。

自然の力が創り上げた、なごやの地形と水の違いは、
そこにそれぞれ違った生きものたちを育みました。



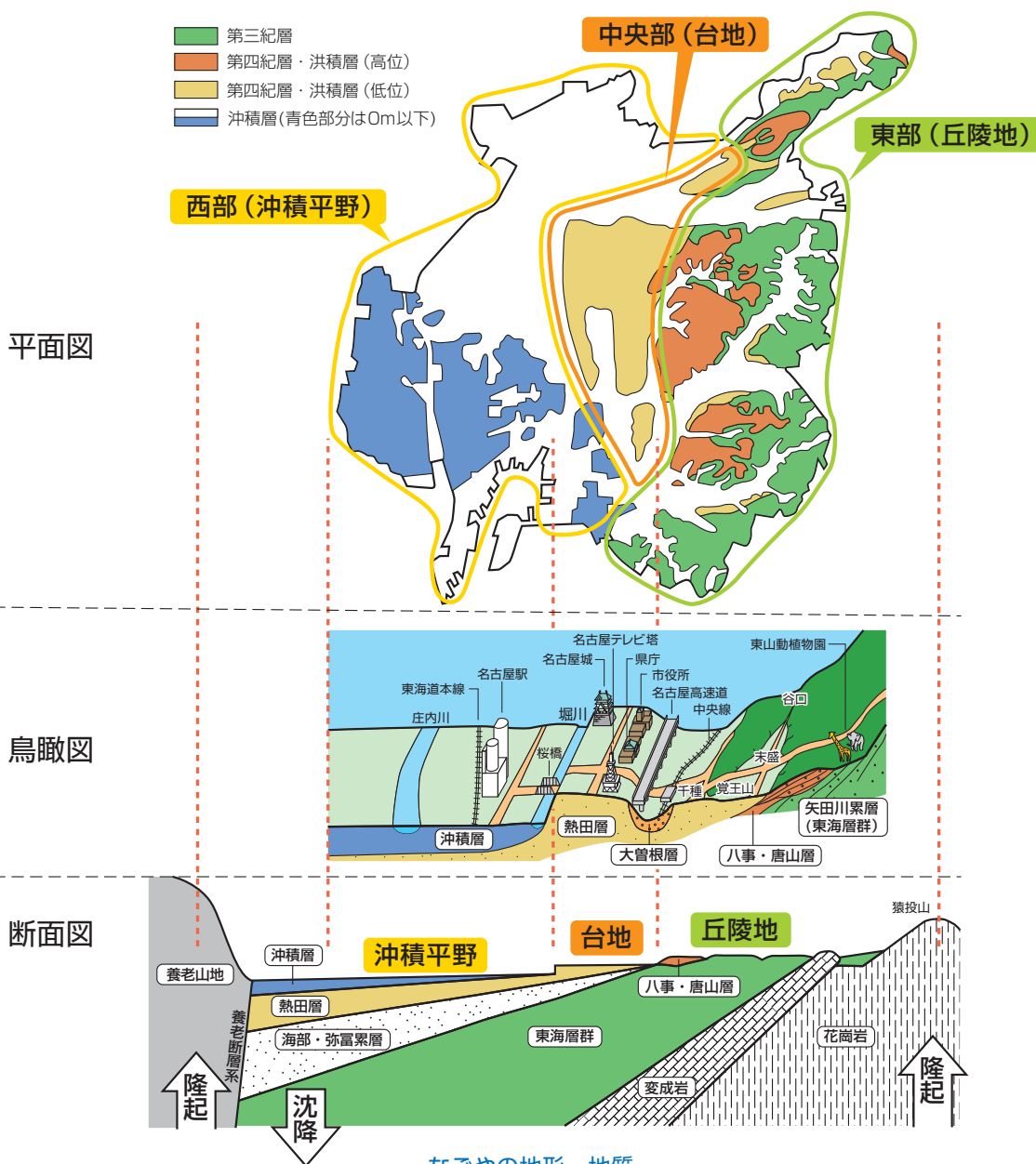
①地球の変動が創った3つの地形

～隆起と侵食と堆積が3つの地形を創った～

- 地形・地質は、生態系を支える土台です。
- 地層はできた年代やそのでき方で、それぞれ性質が違ってきます。
- なごやの大地の成り立ちから、西部・中央部・東部の土地の違いをみてみましょう。

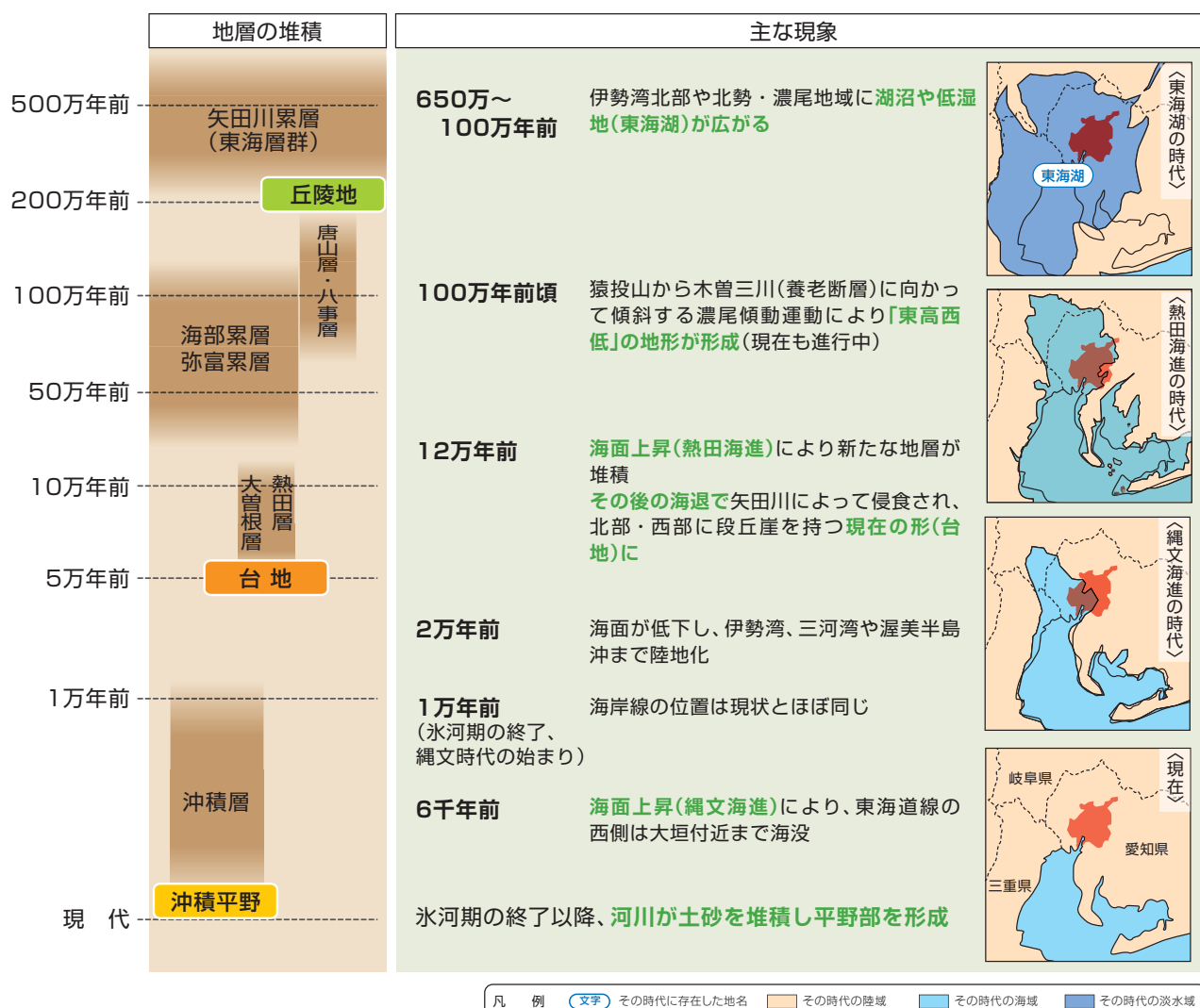
なごやの地形

- なごやの地形は、大きく3つ（西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地）にわけられます。
- これは、人類が誕生するはるか昔から続く、地形の形成作用によるものです。



出典：なごや環境ハンドブック下巻（「なごや環境大学」実行委員会 平成20年）、名古屋の大地とその生い立ちー見てみよう、調べてみよう、郷土の地質遺産（村松憲一 2007年）より作成

なごやの地形ができるまで



出典：新修名古屋市史 第8巻 自然編(名古屋市 平成9年)、日曜の地学24 東海の自然をたずねて(東海化石研究会 1997年)より作成

なごやの地形の変遷

- なごやの地形・地質は、長い年月をかけ、隆起や侵食・堆積などの作用を受けて創られました。
- その成り立ちの違いは、それぞれの土地の「起伏」・「土質」・「水はけ」などの違いを生んでいます。
- 濃尾平野は、地表面も地下の地層も西に傾いています。それは濃尾傾動運動という大地の隆起・沈降運動によるものです。これは100万年ほど前から始まり、現在まで続いています。
- まず、かつての東海湖に堆積した地層が隆起し、東部の丘陵地帯となりました。その後、上昇した海の底に堆積した地層が、海面の低下で地上に現れ、中央部の台地を創りました。そして、低くなった西側には河川が流れ、その堆積物によって平野ができました。

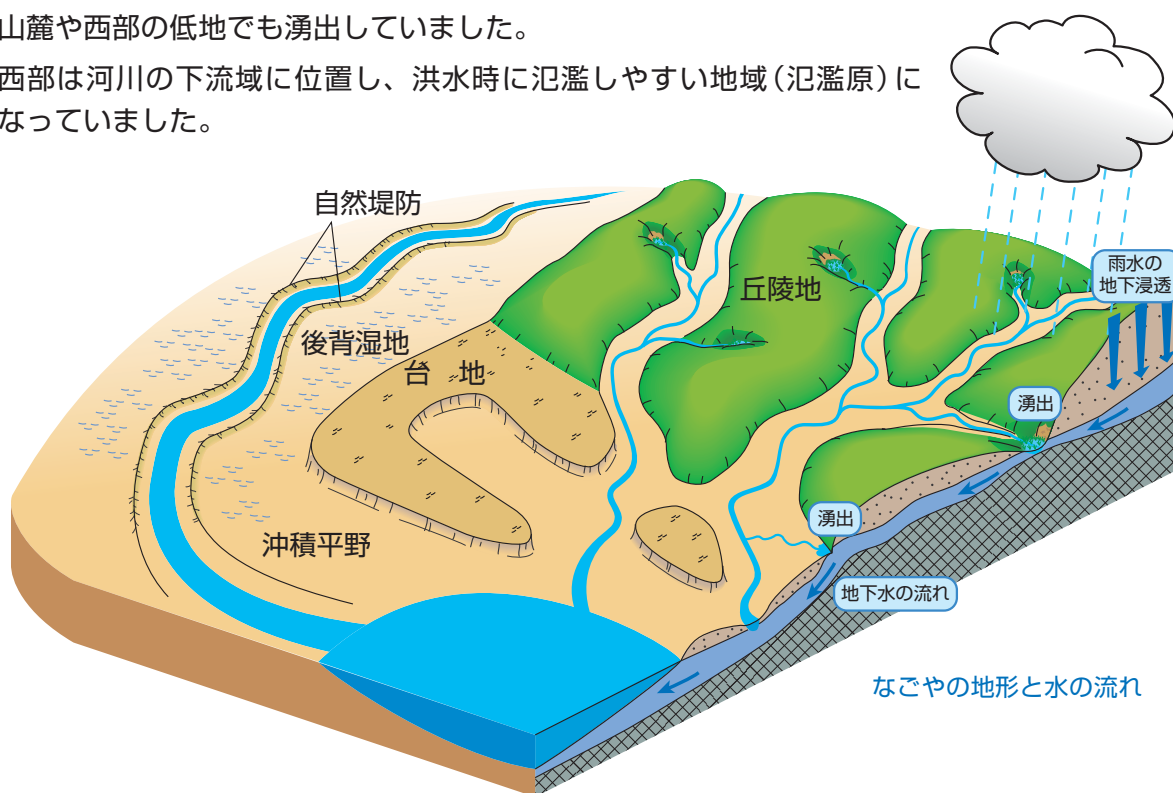
②環境からみえてくるなごやの固有性

～地形や気候からなごやの自然環境の基盤が築かれる～

- 地形や気候は、その土地のもつ固有性（潜在能力）を示す基盤です。
- なごやの自然環境の基盤がどのようなものかみてみましょう。

なごやの地形と水の流れ

- 東部の丘陵地に降った雨の一部は、大地にしみ込み、地下水となります。
- 地下水の一部は、丘陵地のところどころで湧出して湿地を形成したり、山麓や西部の低地でも湧出していました。
- 西部は河川の下流域に位置し、洪水時に氾濫しやすい地域（氾濫原）になっていました。



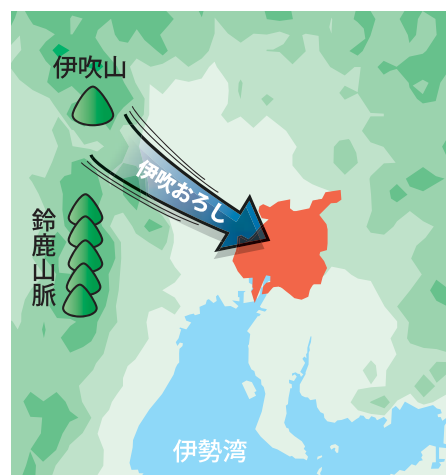
伊吹おろし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なごやが位置する濃尾平野では、冬季、「伊吹おろし」と呼ばれる北西の季節風が吹きます。「おろし」とは山から吹き降りてくる風の総称で、伊吹おろしは、冬季の季節風が伊吹山地を越えて濃尾平野に吹くものです。

伊吹おろしは、等圧線が南北の縦じま模様と並んだ西高東低の冬型気圧配置のときに吹走し、12月下旬から2月にかけて強く吹く風です。

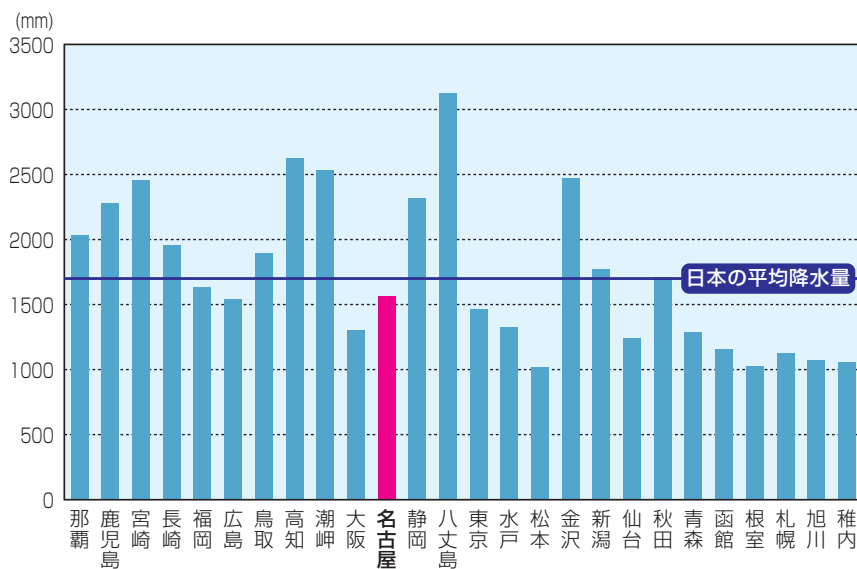
以前は、この北西の風に備えるため、平野の北西部では家屋の風上側に屋敷森が植えられていました。また、中川区の庄内川河川敷では、イチゴやインゲンマメを障子紙やわらで囲んで保護していたという記録が残っています（『庄内川流域史』）。昭和区御器所周辺や千種区には「吹上」という地名があり、伊吹おろしにちなんだ地名が使われています。

参考：伊勢湾岸の大気環境（大和田道雄 1994年）



なごやの気候

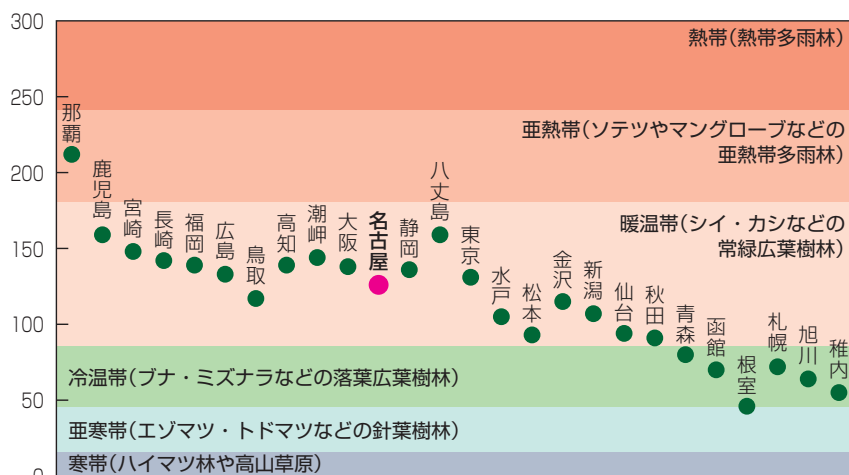
- 日本の降水量は森林が生育するのに十分な量であり、なごやの降水量は日本全国平均よりもやや少ない程度です。



備考：1971年～2000年の平均値

年間降水量

- 日本には、亜寒帯から亜熱帯の気候がありますが、なごやは暖温帯に位置し、人為的な影響が弱い場合は、シイ・カシなどの常緑広葉樹林が成立する条件にあります。



備考：暖かさの指数とは、平均気温が5℃以上の月の平均気温から5℃を引いた値を1年間積算したもの

暖かさの指数と気候帯

- 地形と水の流れによって、なごやの生きものが育まれる基盤が創られていきました。
- なごやとその周辺は、日本の中間的な気候で、地理的にも日本の東西の接点に位置します。多様な生きもののすみかとなる一方、分布の境界になっている生きものもいます。
- 東部の丘陵地に形成された湧水湿地には、日本でもなごやとその周辺にしか分布しない固有の生きものたち（東海丘陵要素の植物など）が育まれていきました。

③ 人の手が入る前のなごやの生きもの

～地形と水が生きものを育む～

- 太古のなごやでは、自然が創った地形と水に応じた生態系が育まれていました。
- 人の手がほとんど入っていなかった時代の、なごやの生きもの達の姿を想像してみましょう。

太古のなごや（自然環境に人の手がほとんど入っていなかった時代。おおむね弥生時代前期頃。）

西部 (沖積平野)

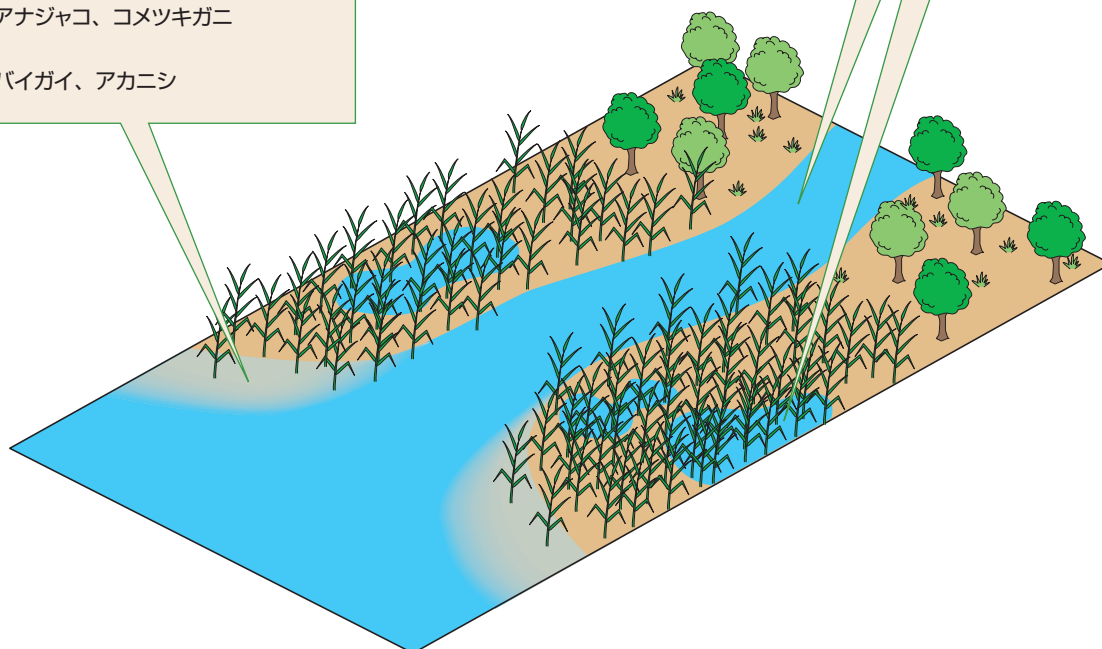
西部の海岸には干潟や砂浜が広がり、甲殻類や貝類、それを餌にする鳥類などが生息・利用していたと考えられます。水辺にはヨシ原が広がり、池や沼も点在していたでしょう。

自然海岸に広がる干潟や砂浜

- 植物 ハマボウ、シバナ、アマモ
- 鳥類 ミサゴ、マナヅル、シロチドリ
- 魚類 スズキ、コノシロ、マハゼ
- 甲殻類 アナジャコ、コメツキガニ
- 貝類 バイガイ、アカニシ

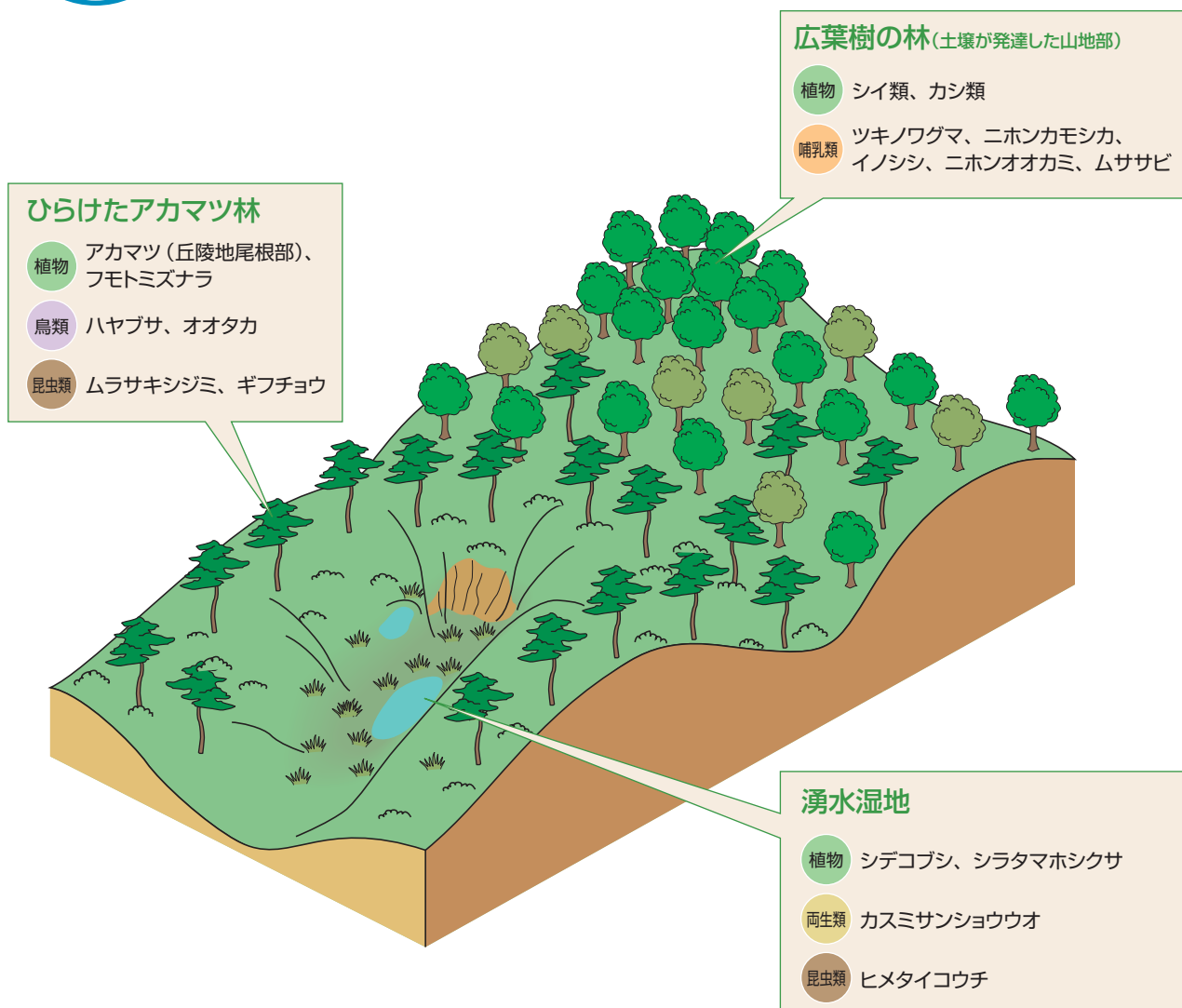
自然状態の川、点在する池や沼

- 植物 ヨシ、マコモ、ヤナギ類
- 哺乳類 ニホンカワウソ、カヤネズミ
- 鳥類 チュウヒ、チュウサギ
- 両生類 ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ
- 魚類 イチモンジタナゴ、イタセンパラ
- 甲殻類 ヤマトヌマエビ
- 昆虫類 タガメ
- 貝類 ヤマトシジミ



中央部 や東部 (丘陵地)

東部では、山地部の土壌が発達したところに広葉樹の林があり、丘陵地の尾根部など貧栄養の環境には、アカマツのまばらな林があったと考えられます。丘陵に挟まれた谷の奥にみられる湿地には、その環境に適応した植物が生育していたでしょう。



参考資料：環境考古学事始(安田喜憲 2007年)
森の日本文化(安田喜憲 1996年)
東海の自然史(自然史編纂調査会 1990年)
新修名古屋市史 第8巻 自然編(名古屋市 平成9年)

- 西部には、湿地や干潟を中心とする水辺の生態系が形成されていたでしょう。
- 東部の丘陵地では、土壌が発達した場所にシイ類やカシ類などを中心とした広葉樹の林、尾根部など貧栄養地にアカマツのまばらな林が広がっていたでしょう。谷の奥にみられる小さな湿地では、シデコブシやシラタマホシクサなど氷河期以後もこの地域で生きのびた植物(東海丘陵要素)がみられたでしょう。
- 今でも、中央部の熱田神宮や東部の湿地には、太古の時代の自然の姿がわずかに残されています。

コラム

地形の変動と植物 ～東海丘陵要素の植物～

東海丘陵要素の植物群は、厳しい環境にそれぞれの方法で適応し生育しつづけてきた、数少ない大切な植物たちです。

「東海丘陵要素」とは？

東海地方の丘陵地や台地の低湿地とその周辺に固有（世界でこの地域にのみ生育）、あるいは日本でその分布の中心がある植物の総称です。

15種類の植物が東海丘陵要素と呼ばれています。

シデコブシ、マメナシ、ヘビノボラス、ミズナラ近似種（通称：モンゴリナラ）、ヒトツバタゴ、クロミノニシゴリ、ナガボナツハゼ、ハナノキ、ナガバノイシモチソウ、トウカイコモウセンゴケ、ヒメミミカキグサ、ミカワシオガマ、ミカワバイケイソウ、シラタマホシクサ、ウンヌケ



シデコブシ



マメナシ
(写真提供：東山動植物園)



シラタマホシクサ



東海丘陵要素と地層

一般的に、植物群（植生）は、気温や降水量など「気候」を要因として存在していますが、東海丘陵要素の植物は、数百万年に渡って「粘土層」と「砂礫層」が堆積していることが深く関わっています。

東部の丘陵地の地層は、500～600万年前に東海湖を形成した大規模な地殻変動が続いたことが関係しています。なごや周辺では粘土層や砂礫層の堆積が長期間続き、現在まで残る地層が形成されました。

他の植物が生育しにくい環境

東海丘陵要素の植物は、他の植物が生育しにくい厳しい環境に見られます。

- ・ 崩れやすい地盤
- ・ 地表面には栄養分のある土壌層がなく、栄養分の少ない砂礫層
- ・ 湿地をつくる地下水（湧水）は、砂礫層を通ってきたため栄養分が少なく、比較的低温

このような環境で生育できるよう適応してきた種や、他の植物と競合しないことで残存してきた種が東海丘陵要素の植物になりました。

参考資料：里山の生態学（広木詔三 2002年）

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

風土に合わせて広がった人の暮らしが、
生きものを変えていく

自然が創った3つの地形の違いを上手く利用しながら、
自然に合わせた人の暮らしが広がっていきました。

※尾張名所図会



右上：有松絞店 右中：富士見原 右下：塚田神社
左上：山吹谷 左下：猫洞池

資料提供：財団法人名古屋都市センター
注：絵は原本を一部加工、着色しています。

① 3つの地形に人が広がる

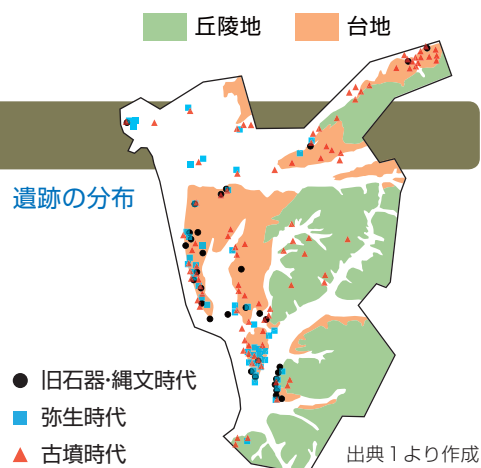
～総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり～

- 今のなごやの自然や生きものは、人の手が加わって形成されたものです。
- 人の生活圏の拡大とともに、必要な生物資源も増えました。
- ここでは、その過程をみていきましょう。

人の広がり

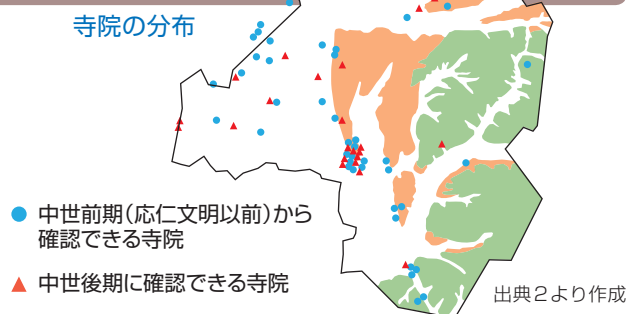
縄文～古墳時代

- 縄文時代には、台地上に集落が形成されました。
- 弥生時代には、氾濫原低地への進出が始まりました。
- 古墳時代には東部の丘陵地への進出が始まりました。



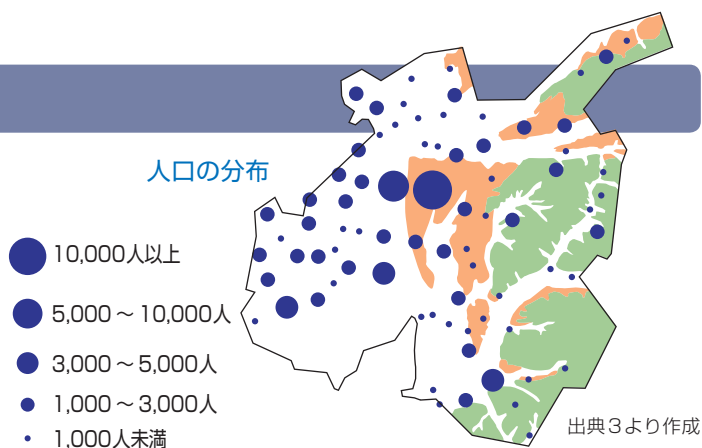
古代中世

- 中央部の台地は、熱田神宮を中心に栄えました。
- 西部の沖積平野全体に人々の暮らしは広がっていきました。
- 東部の丘陵地は、里山として利用されていきました。



江戸時代

- 中央部の台地は、名古屋城の城下町として、発達していきました。
- 西部の沖積平野や東部の丘陵地は、主に農地として開発が進められていきました。

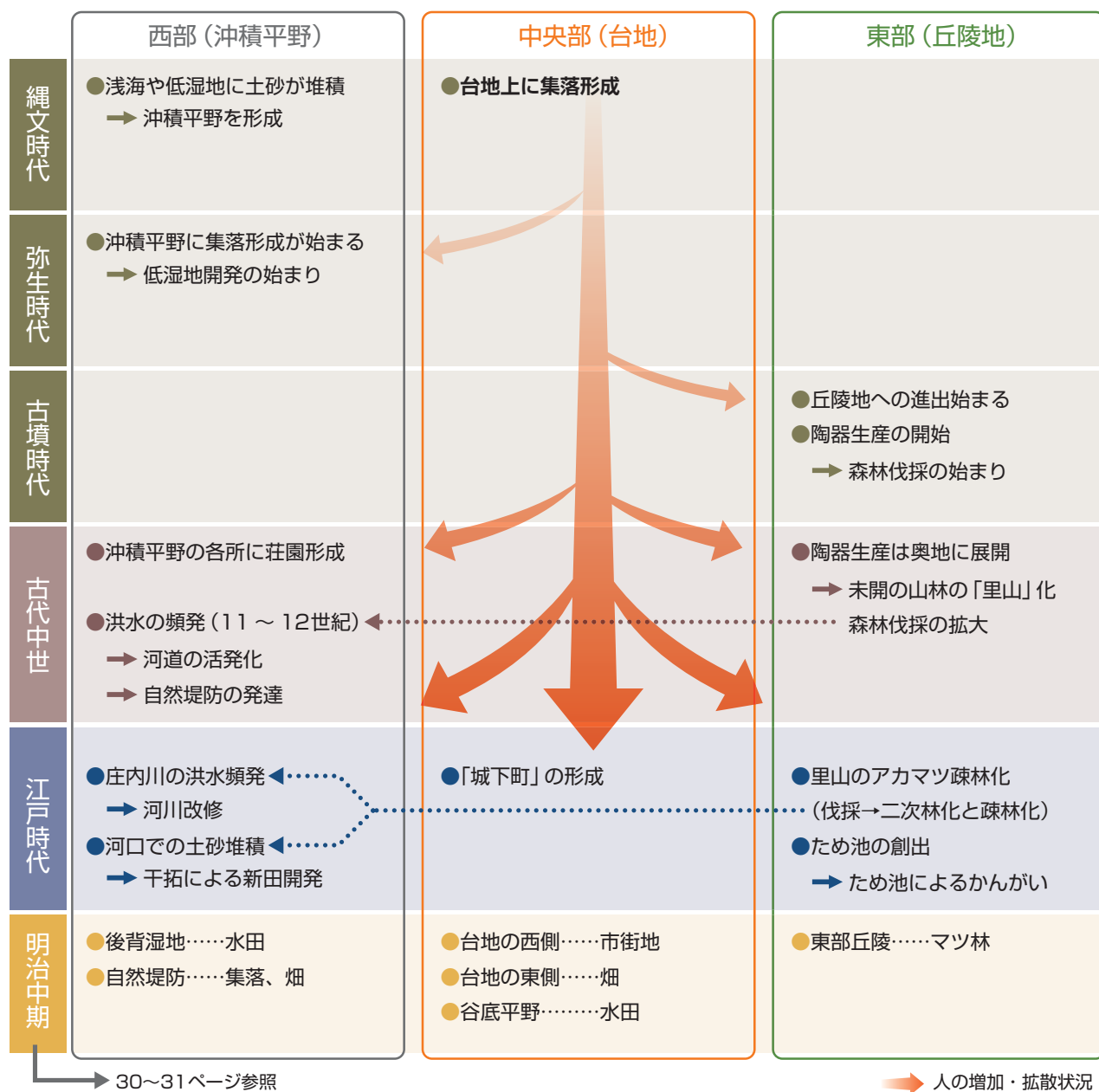


出典1：新修名古屋史 資料編 考古1(名古屋市 平成20年)

出典2：新修名古屋史 第2巻 鎌倉から安土・桃山時代(名古屋市 平成10年)

出典3：新修名古屋史 第3巻 江戸時代前期(名古屋市 平成11年)

なごやのまちができるまで(徐々に進んだ自然の改変)



- 自然の改変は、人の登場と共に始まりました。
- 3つの地形や水の流れの違いを上手く利用しながら、人の生活圏が拡大していきます。
- 森林の木材を利用しながら、干拓やため池灌漑で農地を拡大し、増加する人口を支えました。
- 市場には季節ごとの様々な魚や野菜が流通していました。

②西部には田んぼや畑が広がる

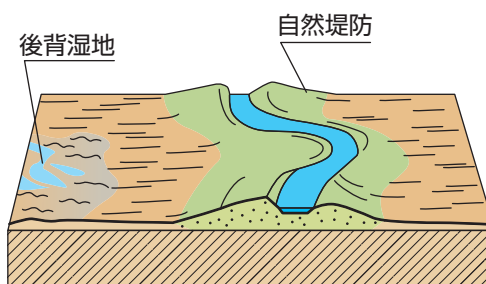
～湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された～

- 西部に広がる低湿地は、豊富な水を利用して、農地として使われました。
- ここでは米や野菜が生産されていました。

西部の地形を活かした人の暮らし

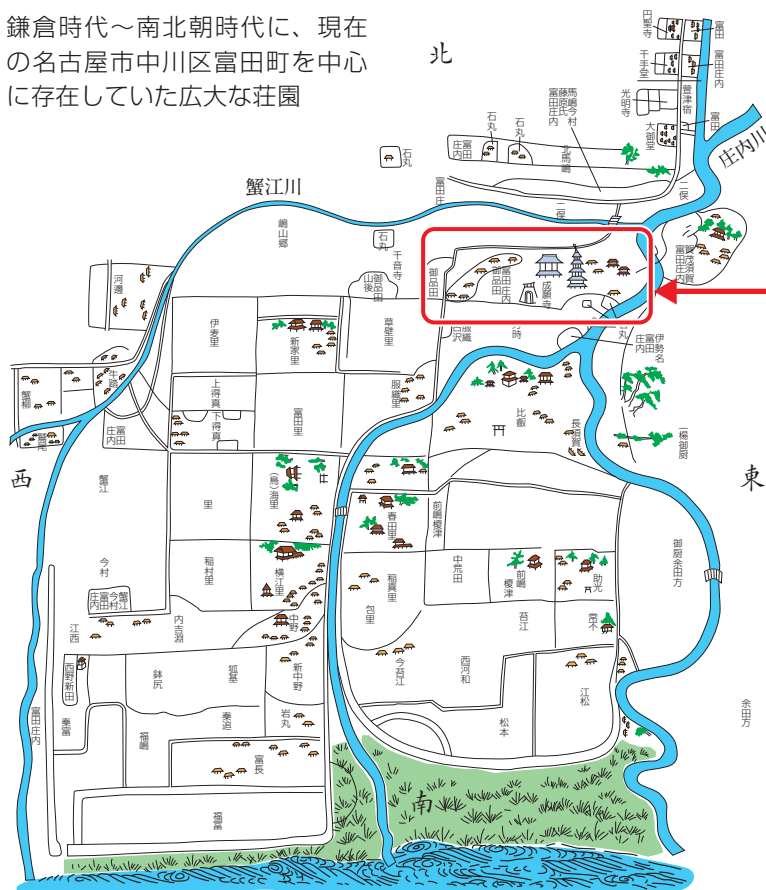
- 上流から運ばれてきた土砂は、川の両わきに堆積して「自然堤防」をつくります。
- 川から離れた場所は河床よりも低くなり、「後背湿地」とよばれる湿地になります。
- 鎌倉時代の荘園（富田荘）をみると、地形を活かした暮らしが営まれていた様子をうかがうことができます。

富田荘古図と微地形分類図を見比べると、例えば成願寺とその周辺の建物は、周囲よりも地盤の高い自然堤防上に形成されていたことが推測されます。

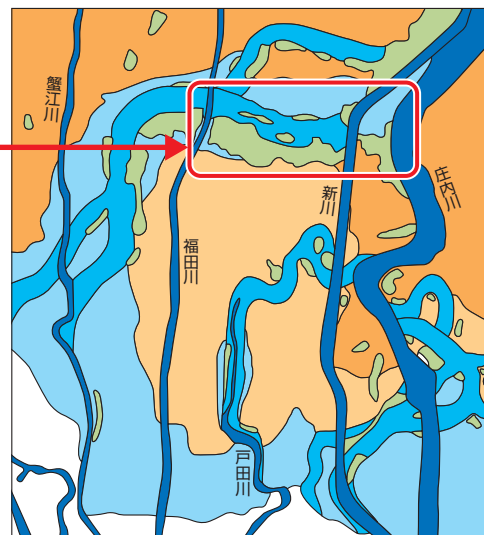


富田荘古図

鎌倉時代～南北朝時代に、現在の名古屋市中川区富田町を中心に存在していた広大な荘園



富田荘周辺の微地形分類図



三角州上位面
 三角州下位面
 自然堤防
 現河道
 旧河道
 後背湿地

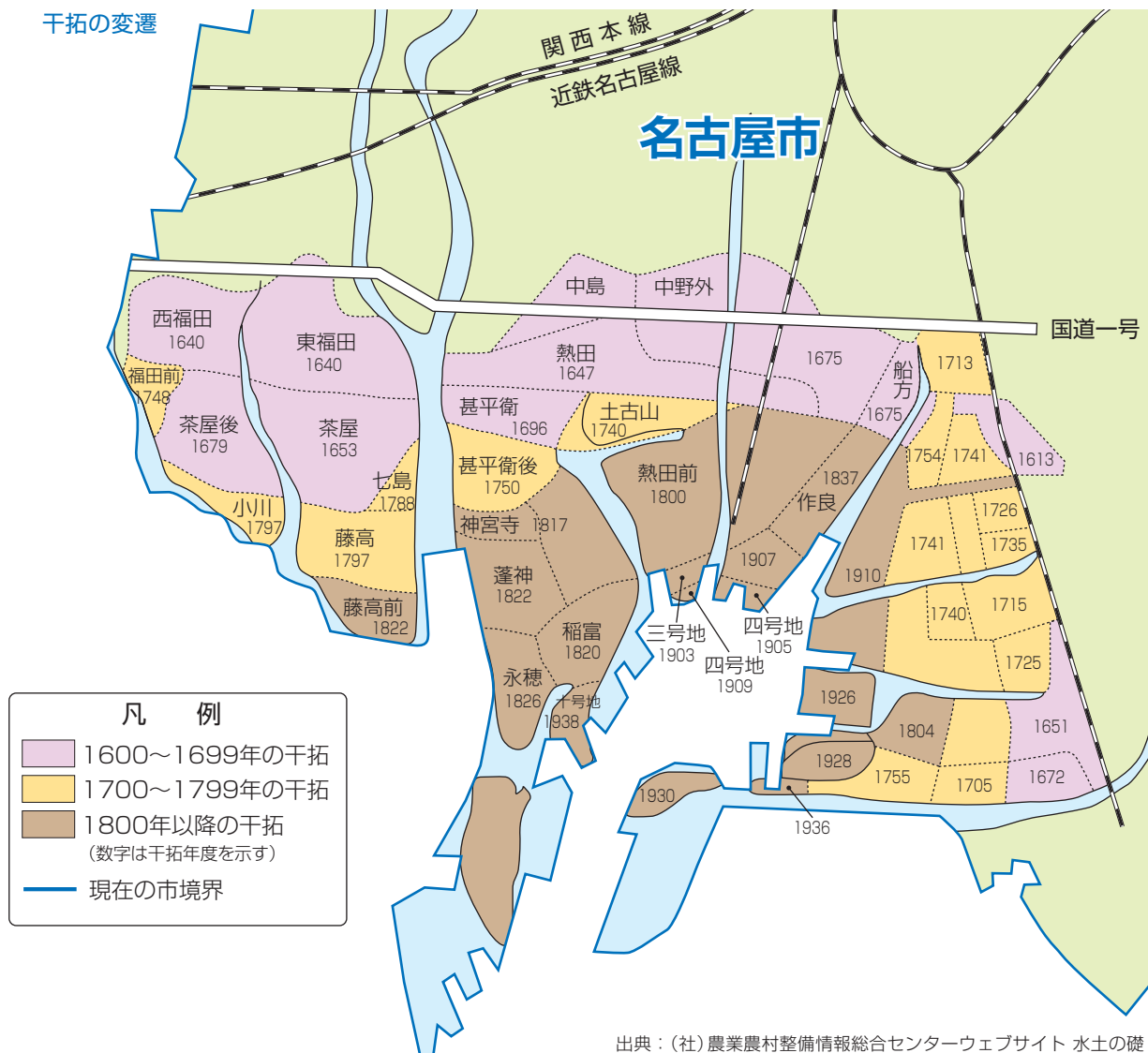
出典：安田喜憲 尾張国富田庄の歴史地理学的研究，立命館文学303,1970 より作成

出典：新修名古屋史第1巻（名古屋市 平成9年）より作成

干潟から農地へ

- 江戸時代になると、広く新田開発(干拓)が進められました。
- 生きもののすみかも、干潟から農地へと変化しました。

干拓の変遷



出典：(社)農業農村整備情報総合センターウェブサイト 水土の礎
(<http://suido-ishizue.jp/index.html>) より作成

- 西部では、自然堤防などの微高地に集落や畑が作られ、低湿地は水田として利用されていました。
- 中世には、森林の過剰伐採による洪水が頻発しはじめます。
- 江戸時代に入ると、干拓による新田開発が進み、食料の生産がさらに増え、当時のなごやの食を支えていました。

③ 東部には里山が造られる

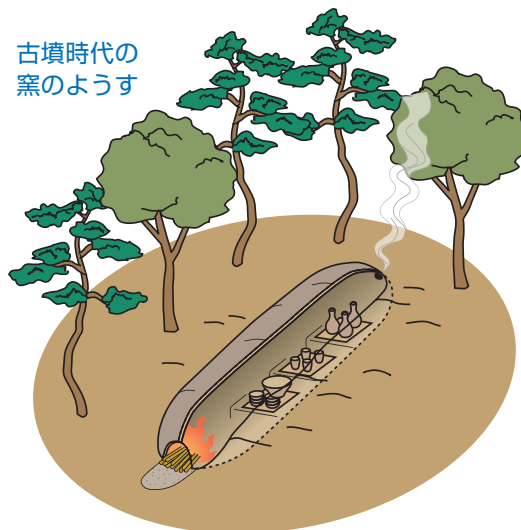
～森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された～

- 東部の丘陵地では、河川から水を引くことが難しいため、ため池灌漑が進められました。
- 森林に継続的に人手が加わり、「里山」が形成されていきました。

森林資源利用のはじまり

- 縄文土器・弥生土器は、焚き火で焼かれましたが、古墳時代の土器は、山の斜面を掘ってつくる「あな窯」で焼かれました。
- 古墳時代になると、東部の丘陵地では陶器生産が始まりました。
- 窯の出現によって、燃料の薪がたくさん必要になり、これまで以上に樹木が伐採されるようになりました。
- この地域の地層にみられる粘土は、良質な焼物の原料なのです。

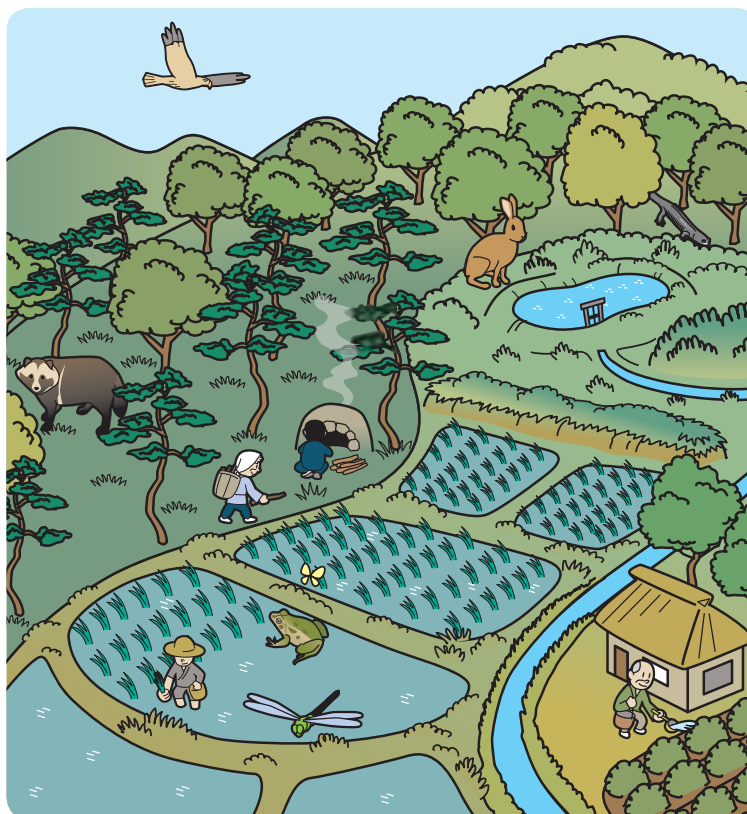
古墳時代の
窯のようす



出典：おもしろやきもの展ハンドブック（名古屋市博物館 平成12年）、里山の生態学（広木詔三 2002年）より作成

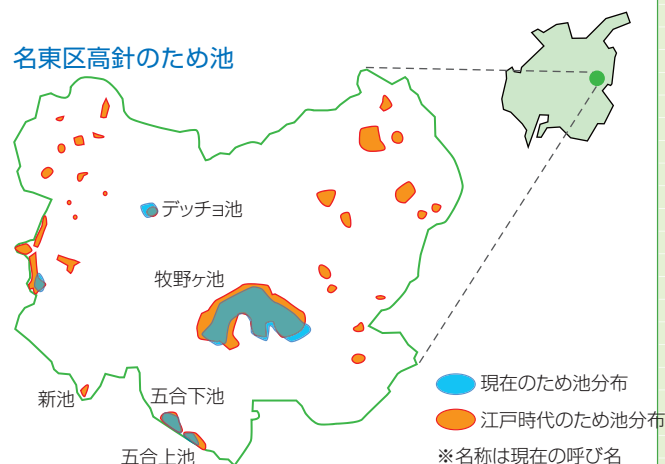
里山の生活

- 里山として利用されていた時代（中世～江戸時代）の想像図です。
- 里山では、農地とため池、雑木林がセットになっていました。
- これらの環境は、多くの生きもののすみかになっていました。



丘陵地のため池

- 東部の丘陵地では、農業用水が不足するため、多くのため池がつけられました。
- 現在の名東区高針は、むかし高壟(たかばり)とよばれ、36のため池があったとされています。「高」「壟」という漢字から、「開墾した高い場所」であったことがわかります。



出典：新修名古屋市史 第4巻 江戸時代後期(名古屋市 平成11年)より作成

江戸時代における森林伐採

- 江戸時代の絵図をみると、寺のまわりや池の背後の丘陵地にマツがまばらに描かれています。
- マツは伐採した跡地に最初に生える樹木なので、この図から、広い範囲で森林が伐採されたようすをうかがうことができます。

1840年ごろの名東区蓮教寺、牧の大池



資料提供：財団法人名古屋都市センター
注：絵は原本を一部加工、着色しています。

- 丘陵地に暮らす人々は、水を確保するためにため池を造り、稲作や畑作を行っていました。
- 森の樹木や草は燃料や肥料として使われ、次第に雑木林となりました。
- こうして、農地とため池、樹林地で構成される「里山」の暮らしが営まれていました。

④ 中央部には町が発達する

～台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた～

- 中央部に広がるなだらかな高台には、古くから集落が発達していました。
- そして、名古屋城の築城により、城下町が築かれたことで、消費と文化の中心地となりました。

城下町の形成

- 400年前、中央部の台地には、清須越によって、名古屋城を中心とする都市がつくられました。

名古屋城周辺



熱田神宮周辺



出典：名護屋図（名古屋博物館蔵）

城下町を支えた食の供給

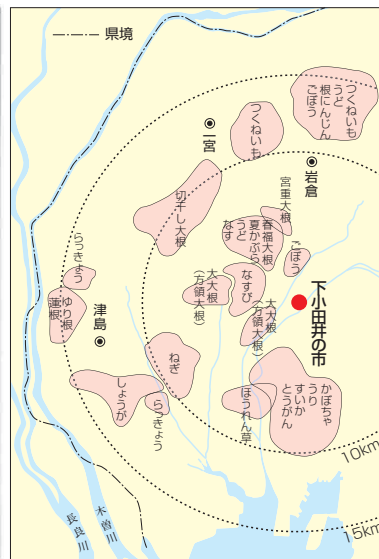
- 熱田には魚市場、下小田井（現清須市）には青物市場がありました。
- 下小田井には、西部だけでなく、尾張全域から野菜が集まっていました。関東や四国から届くものもあったそうです。

熱田魚市場



出典：尾張名所図会 前編四（岡田啓・野口道直著 1997年）

尾張平野の農産物

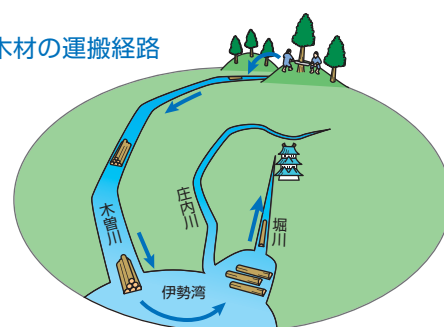


出典：図説 名古屋圏—その構造と問題—（名古屋都市圏研究会編 1993年）より作成

城下町を支えた木材の供給

- 熱田区白鳥には大きな貯木場があり、木曾で伐られた木材は、いったん木曾川をくだり伊勢湾まで運んだ後、堀川を利用して熱田に運ばれてきました。

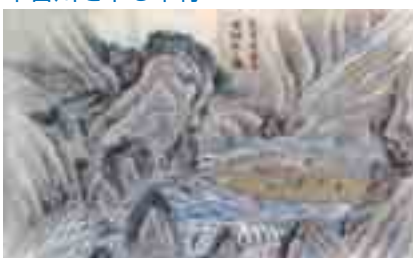
木材の運搬経路



加子母での伐採



木曾川を下る木材



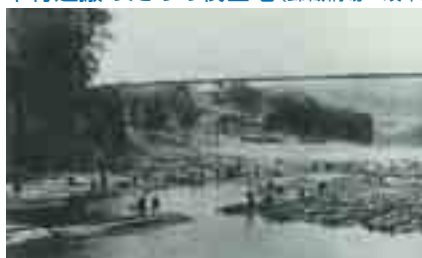
白鳥に到着した木材



濃州恵那郡加子母山ヨリ檜大材伐出谷川下之図(神宮文庫所蔵)

官材川下之図(神宮文庫所蔵)

木材運搬のための筏基地(錦織網場：岐阜県加茂郡八百津町)の様子(明治～大正時代)

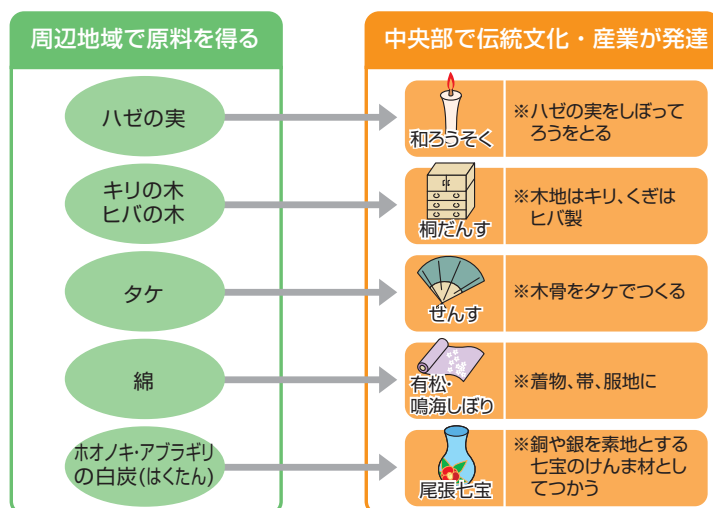


写真提供：八百津町教育委員会

伝統文化と産業

- 周辺地域から得られる自然資源を利用して、さまざまな伝統文化や産業が生まれました。

自然資源から生まれた伝統文化



出典：名古屋の伝統産業ウェブサイト(<http://www.u-net.city.nagoya.jp/business/dentou/>)、あいちの伝統的工芸品ウェブサイト(<http://www.aiweb.or.jp/dento/>)より作成

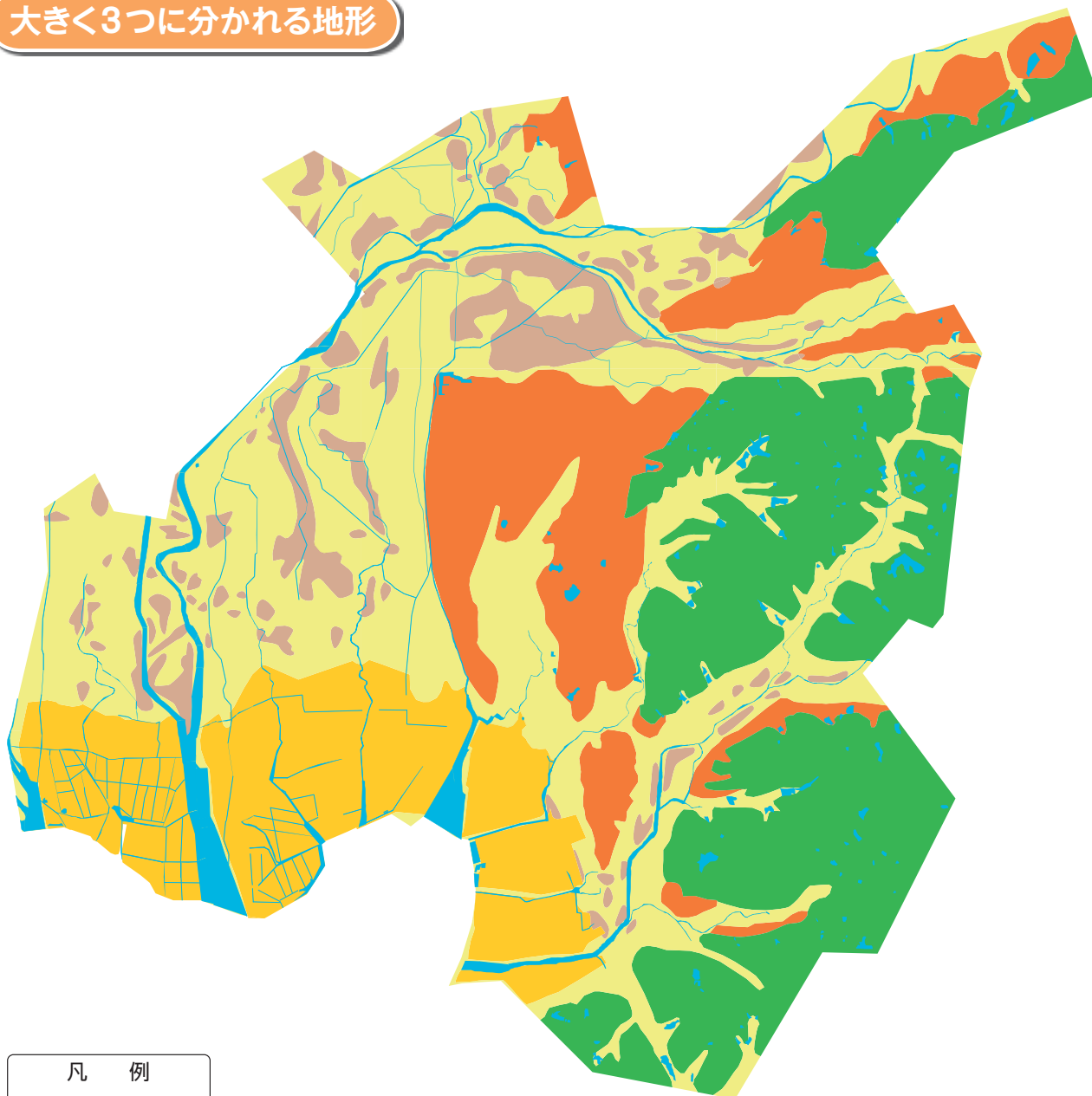
- 中央部の台地は、古くから集落が発達していました。
- そして、周辺地域の食料や資源を利用した、町の暮らしが築かれていきます。
- 名古屋城の城下町として、現在に伝わる様々な伝統文化が花開きました。

⑤ 100年前のなごやの姿

～100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた～

- なごやの生物多様性は、人と自然が創りあげてきたものです。
- 100年前のなごやの土地利用をみてみましょう。

大きく3つに分かれる地形



凡 例

- 丘陵地
- 台 地
- 沖積平野
- 自然堤防・砂州
- 干拓地
- 水域

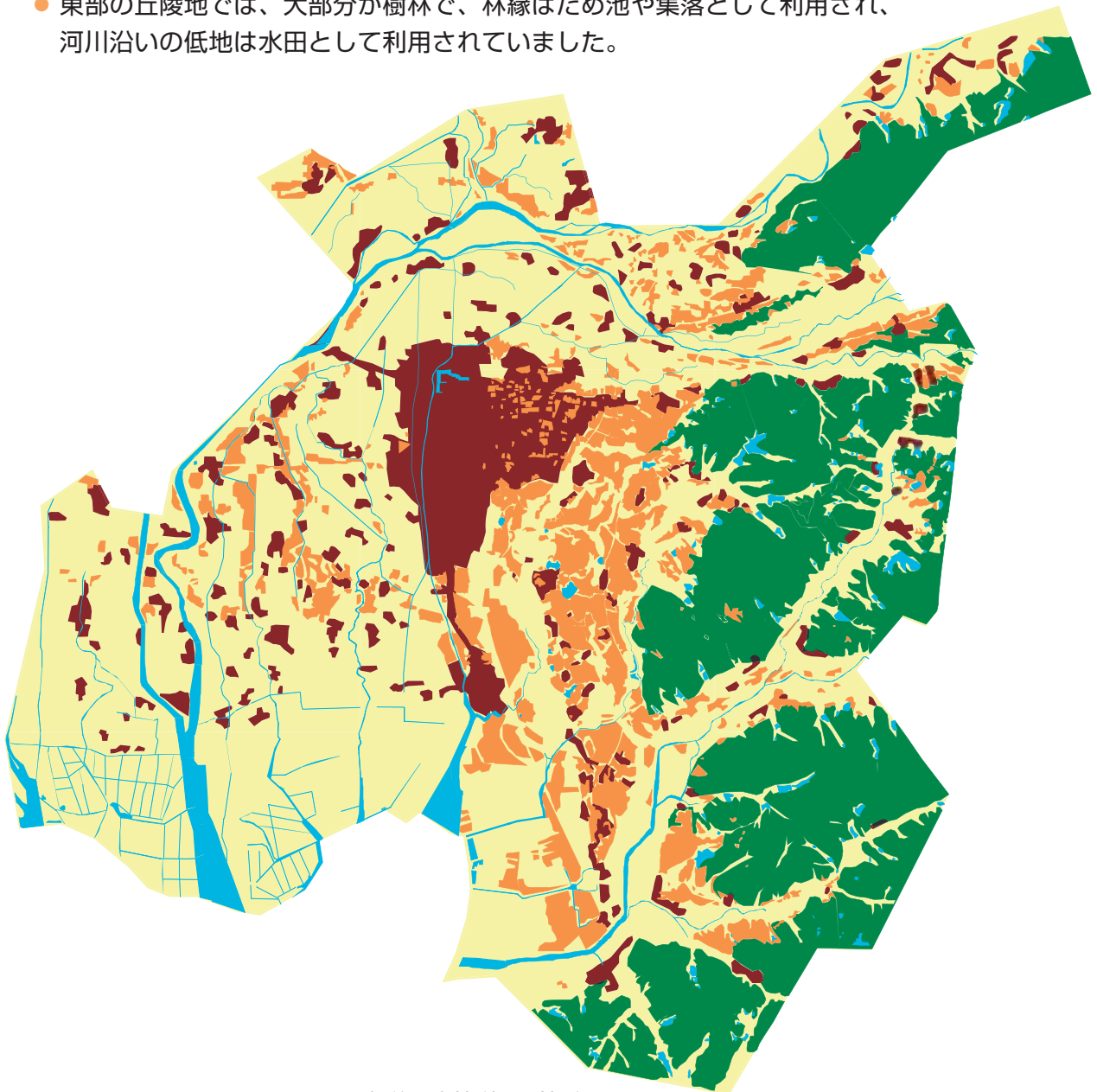
注：現在の市域に当てはめて図示しています

出典：明治・昭和東海都市地図（柏書房株式会社 1996年）、庄内川治水地形分類図（下流）改訂版
（国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所 平成16年）より作成

地形に合わせた土地利用

100年前の土地利用と地形を見比べると・・・

- 西部の沖積平野では、自然堤防（微高地）は集落や畑として利用され、その他の低地は水田として利用されていました。
- 中央部の台地では、西側は市街地、東側は畑として利用されていました。
- 東部の丘陵地では、大部分が樹林で、林縁はため池や集落として利用され、河川沿いの低地は水田として利用されていました。



凡 例	
	樹林
	市街地・集落
	畑
	水田
	水域

100年前の土地利用と地形

区分 \ 地域	西部			中央部	東部
地形	沖積平野			台地	丘陵地
	氾濫原低地	自然堤防	干拓地		
土地利用	水田	畑	水田	畑	樹林
		集落	畑 集落		
				市街地	

出典：明治・昭和東海都市地図（柏書房株式会社 1996年）より作成

⑤ 100年前のなごやの姿

100年前のなごや

西部 (沖積平野)

西部の海岸近くでは低湿地が干拓され、水田開発が進みました。水田は生きものにとって新たなすみかとなりました。

集落の出現

- 植物 ススキ、イタドリ
- 哺乳類 ホンドイタチ、カヤネズミ
- 鳥類 オオタカ、オオヨシキリ

水田内に点在する島畑

用水路による取水、河道の縮小

干拓地の創出

自然海岸の減少、干潟や砂浜の減少

- 鳥類 ミサゴ、ツルシギ、シロチドリ
- 魚類 スズキ、コノシロ、マハゼ
- 甲殻類 アナジャコ、コメツキガニ
- 貝類 バイガイ、アカニシ、ハマグリ

池や沼の減少、湿地の水田化

- 植物 ヨシ、オギ、マコモ、ガマ
- 爬虫類 ヤマカガシ
- 両生類 ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ
- 魚類 メダカ
- 甲殻類 ヤマトヌマエビ
- 昆虫類 タガメ
- 貝類 ヤマトシジミ

中央部 (台地)

中央部では、まちの近代化が始まり、鉄道や道路が敷かれ、住宅地も増加しました。

水田の点在化

- 植物 イネ、コナギ、オモダカ
- 哺乳類 コウベモグラ、ハタネズミ
- 両生類 トノサマガエル
- 昆虫類 ゲンゴロウ、タガメ

まちの近代化

雑木林の縮小

- 植物 クロガネモチ、クスノキ、ケヤキ、ムクノキ
- 鳥類 オオタカ
- 哺乳類 ホンドキツネ、アカネズミ、ノウサギ、アナグマ

住宅の増加

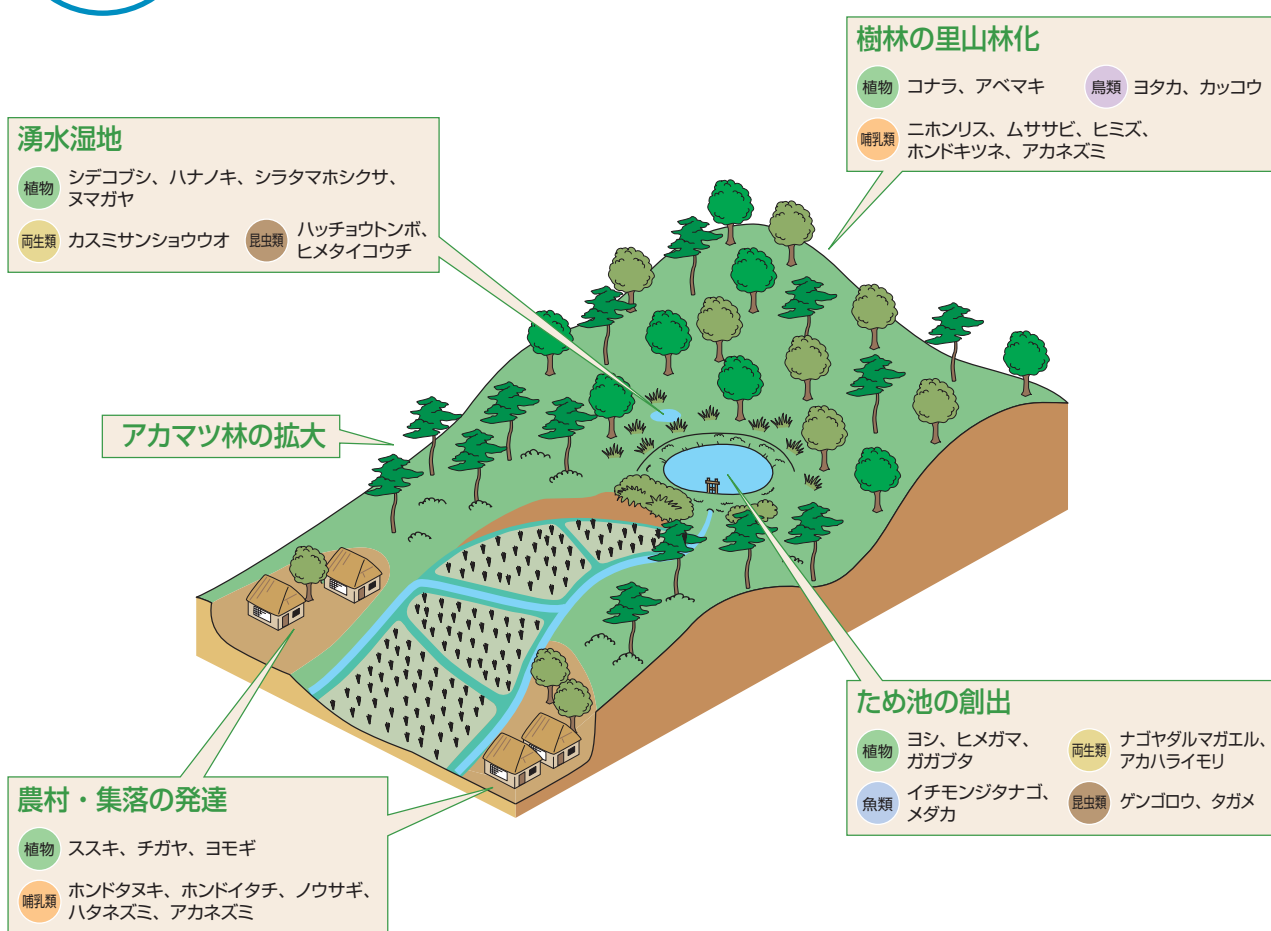
- 植物 カタバミ、ススキ、ホトケノザ、ナズナ
- 哺乳類 クマネズミ、ドブネズミ
- 鳥類 ツバメ
- 爬虫類 ヤモリ、アオダイショウ

鉄道の敷設、未舗装の道路

- 植物 カタバミ、ススキ、ホトケノザ、ナズナ
- 哺乳類 クマネズミ、ドブネズミ

東部 (丘陵地)

東部では、農地—ため池—雑木林がセットになった「里山」が形成されていました。一方で、人の利用が進み、アカマツ林の拡大もみられました。

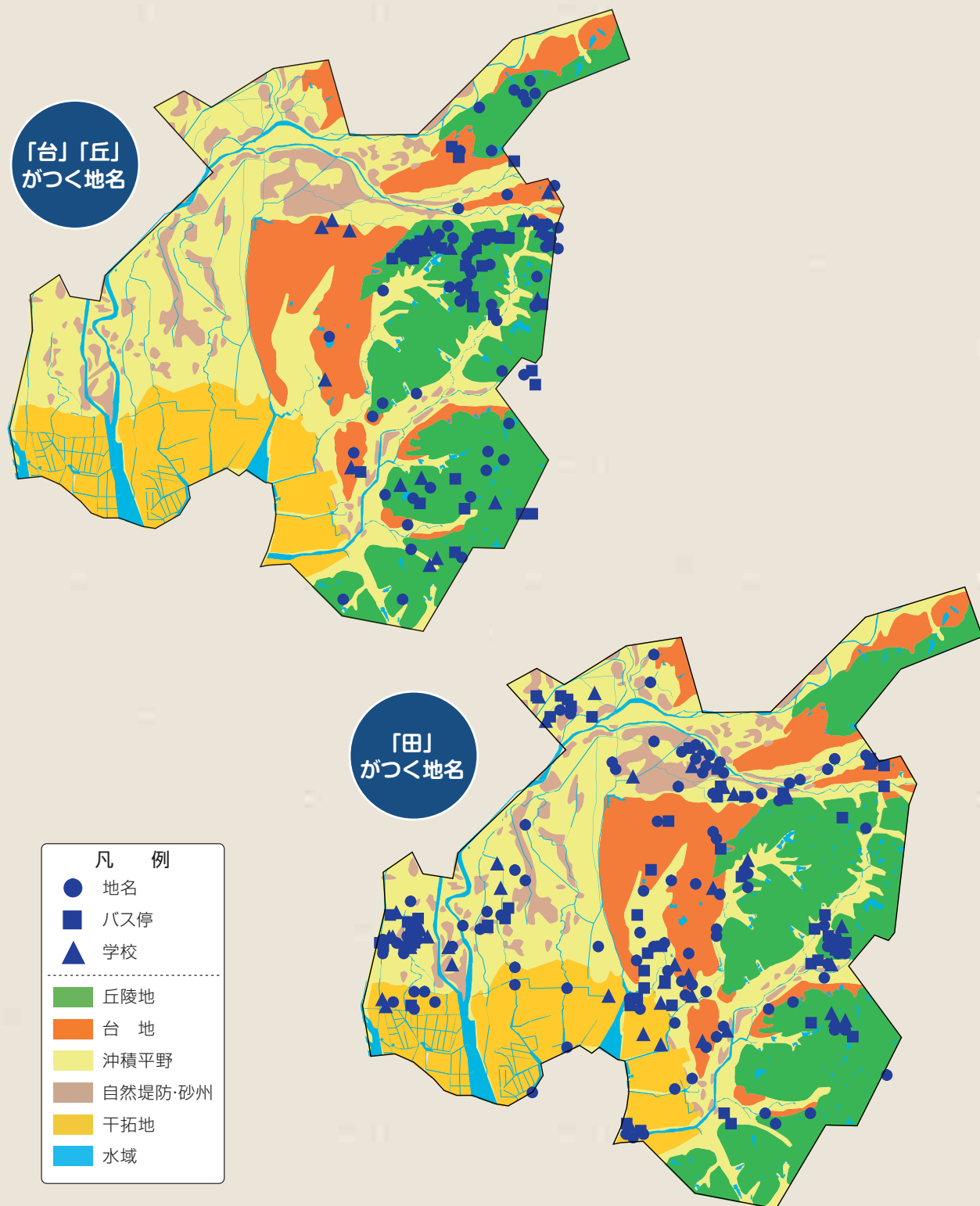


- 有史以来、自然の改変は徐々に進行してきましたが、土地利用は西部・中央部・東部それぞれの自然条件に合わせたものでした。
- 人の暮らしに必要な燃料や食料は、周辺地域から供給されていました。
- 100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていたと考えることができるでしょう。

コラム 地名と地形を比べてみると・・・

地名をみると、その土地がもつ地形や特徴を知ることができます。

名古屋市内の地名やバス停名、学校名をみてみると、「台」や「丘」がつくものは、台地や丘陵地に、「田」がつくものは、水田として利用されていた西部の沖積平野や中央部・東部の低地に集中しています。



(3) 近代都市なごやの発展

近代化とともに、まちや人の暮らしが、
風土から離れていく



写真上：明治後期の栄町（現在の中区栄三丁目）
中：昭和初期の広小路通（現在の中区錦二丁目）
下：昭和11年頃の名古屋駅（昭和12年完成）

写真提供：名古屋市市政資料館

①近代都市としてのなごやの変貌

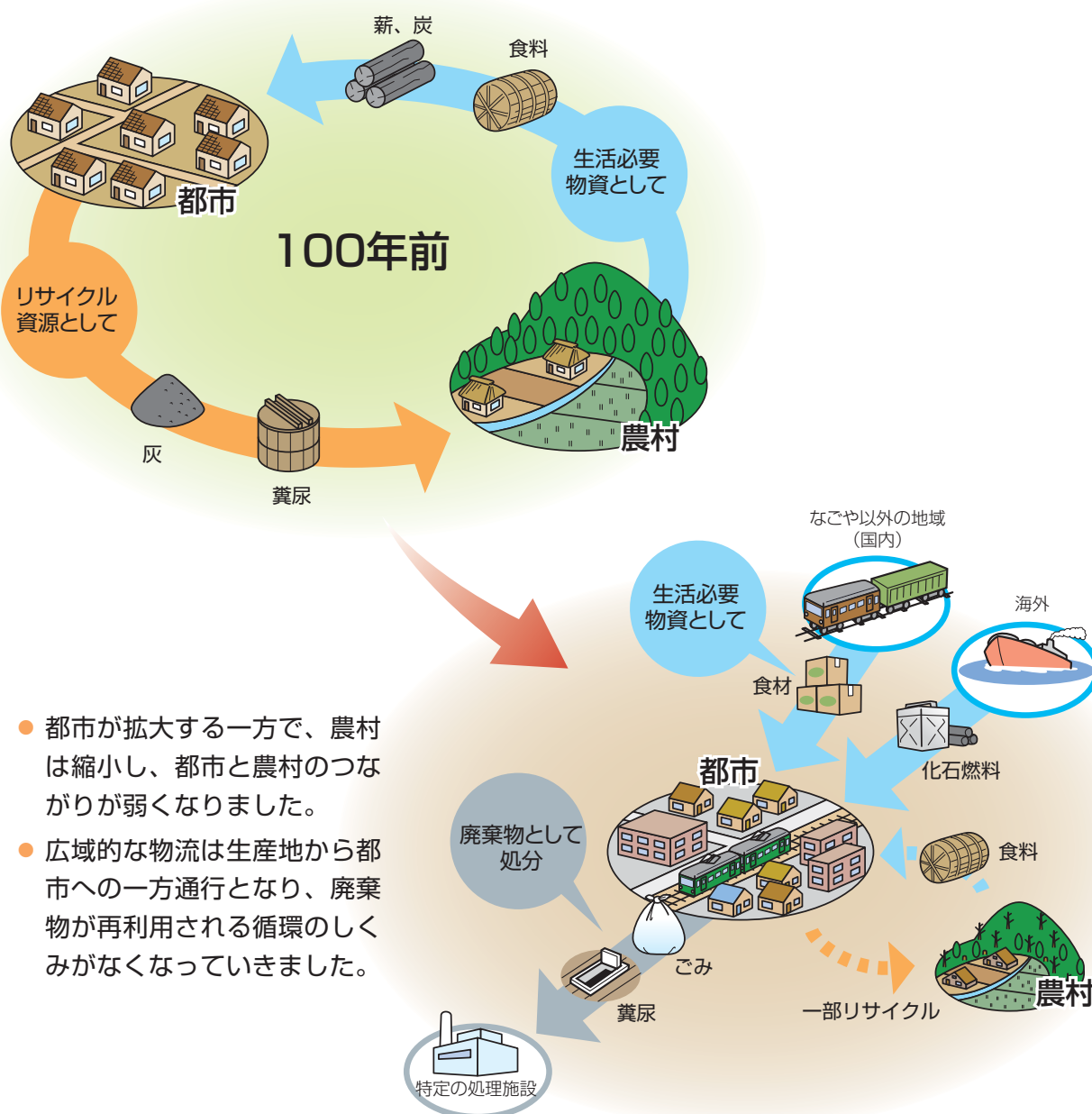
～都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、
近代的インフラ整備の始まり～

- 明治以降、本格的に近代的なまちづくりがはじまり、今のなごやのまちができました。
- ここでは、その様子をみてみましょう。

近代都市への歩み(19世紀末～20世紀前半)

	都市の近代化と戦時体制	築港と運河の開削	区画整理と公園整備	人口
明治	'86 名古屋停車場(笹島)開設 '87 広小路に柳の街路樹 '89 名古屋市制施行(人口16万) 市内に電灯がとる 東海道線全通 '98 市電開通(笹島-栄間)	土砂堆積による熱田湊の遠浅化 ↓ 築港工事に着手('96) ↓ '07 名古屋港開港	'05 耕地整理はじまる '09 鶴舞公園開園 最初の総合公園 '14 童謡「ふるさと」 この頃、第1次里山再生運動が全国的に起こる	16万人 35万人
大正	'07 熱田町を合併(人口35万) '10 上水道着工(→'14給水) '11 下水道着工(→'23竣工) '12 し尿汲み取り市営開始 '15 八事火葬場開設 '17 ごみ焼却所開設 衛生インフラの曙 '20 (旧)都市計画法施行 市営住宅創設 '21 市立保育園開設 16町村を合併(人口62万) '22 市電の市営化 '23 日本初の街路灯(広小路) '26 市内での土葬禁止	'10 新堀川開削 川沿低湿地の工場用地化 この頃、堀川のはえ(銀ぶな)が名物に '24 街路・運河網都市計画決定 都市計画の曙	戦前の耕地整理・区画整理面積 戦前市域の55% (現在市域の27%) '25 区画整理はじまる '26 都市計画公園の決定	62万人
昭和	'34 人口100万人突破 '38 ガソリンが切符制に '40 市バスに木炭バス導入 物資統制(米の通帳制、砂糖・味噌・木炭等の切符制) '41 ガソリン車禁止(代燃化) 戦時統制 '45 終戦(市域の1/4を焼失) '46 復興都市計画の決定	'32 中川運河完成 南西部の工場用地化 この頃、堀川の水質悪化すむ('35のBOD35mg/ℓ) 戦中・戦後の燃料用伐採 →東部丘陵のはげ山化	'35 東山公園・志賀公園開園 '37 東山動植物園開園 '39 風致地区の決定 5,400ha '40 都市計画緑地の決定 826ha 緑地整備の曙 '46 農地改革	100万人

近代化により変化した資源循環



- 都市が拡大する一方で、農村は縮小し、都市と農村のつながりが弱くなりました。
- 広域的な物流は生産地から都市への一方通行となり、廃棄物が再利用される循環のしくみがなくなっていきました。

- 明治22年(1889年)の市制施行で、名古屋市は人口約15万7,000人、面積約13.34km²でスタートしました。
- 明治・大正から昭和の初頭には経済界の活況に伴い、商工業都市として順調な発展を続けました。
- 商業や工業の発達によって、人口は増加し、市街地が拡大しました。
- また、都市の廃棄物を活用していた農村の縮小や化石燃料への転換によって、生物資源の循環は大きく変化しました。

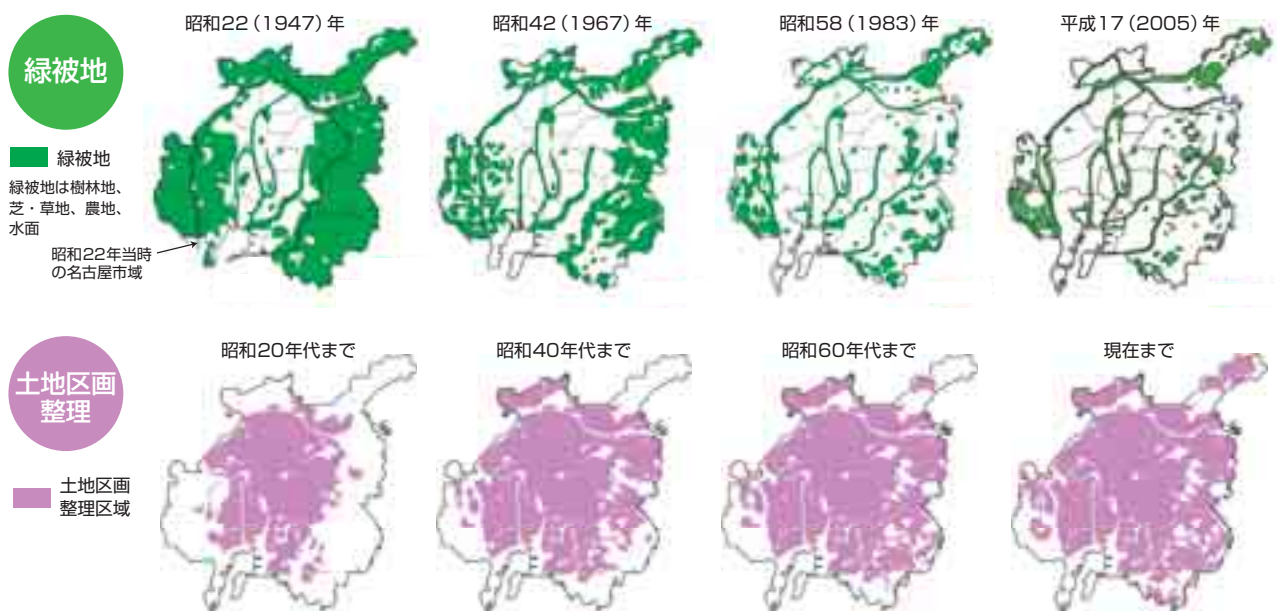
② 20世紀後半の急激な変化(まち)

～自然の摂理を超えた市街化により、失われていくすみか～

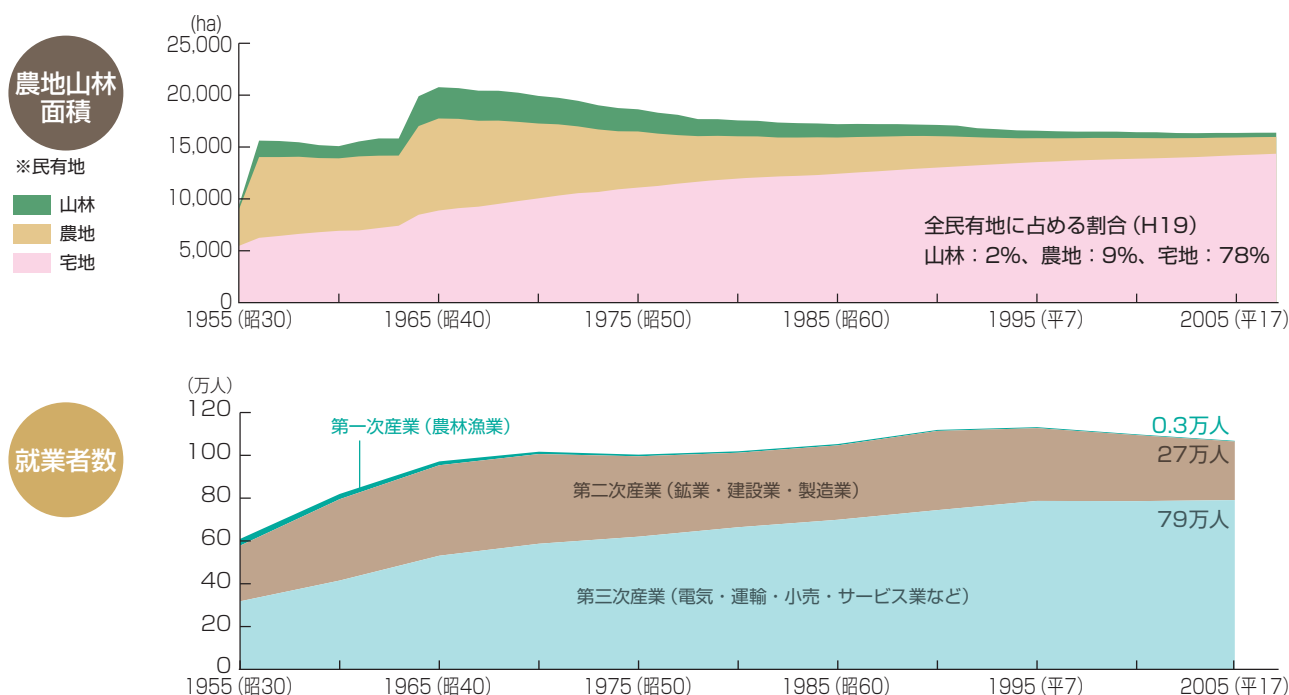
- 20世紀の後半になると、技術の進歩が自然の制約を超えた開発を可能にし、一層の市街化が進みます。

土地利用の変化

- 昭和40年ごろを境に、農地及び山林が減り、宅地が増え続けて急激な都市化が進んでいきます。農林漁業に携わる人も激減しています。

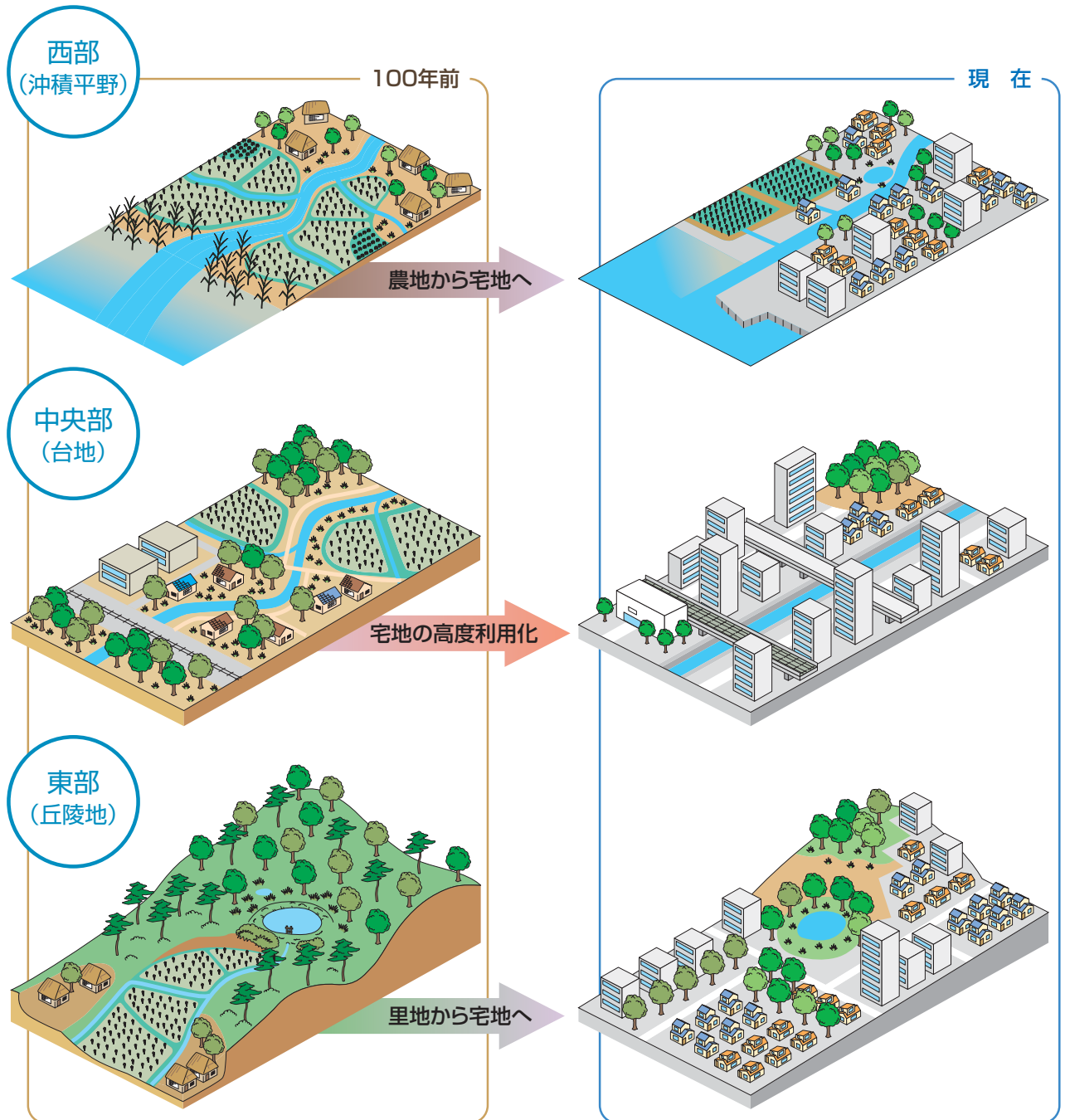


出典：名古屋市土地区画整理区域図(名古屋市 平成21年) 名古屋市みどりの基本計画 花・水・緑 なごやプラン(名古屋市 平成13年)



出典：名古屋市百年の年輪－長期統計データ集－(名古屋市 平成元年) 名古屋市統計年鑑(名古屋市 平成元年～平成20年)

生きもののすみかの変化



- 高度成長期の大都市への人口流入の受け皿として、市域周辺部での区画整理が大きく進み、人口は著しく増加しました。
- 現在のなごやは、市域326.43km²、人口は225万人を超えています。
- 開発による緑地・ため池の消失や公害の発生など、生きものを取りまく環境は大きく変化し、すみかが失われることになりました。

③ 20世紀後半の急激な変化（暮らし）

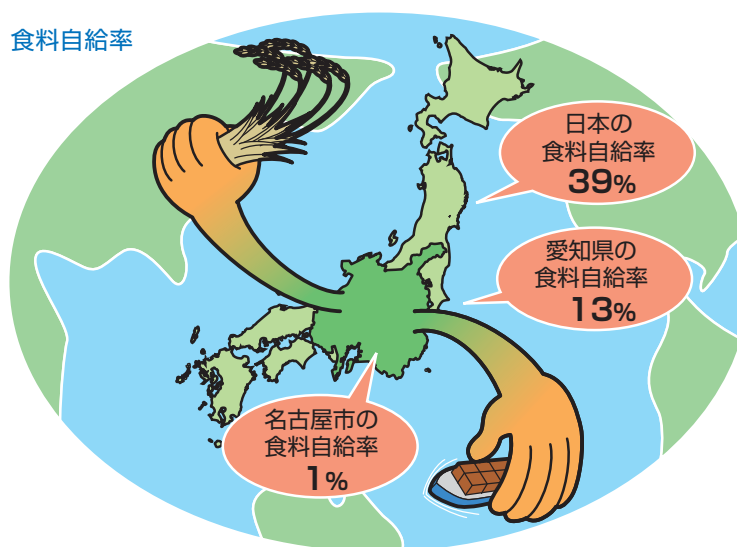
～資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ～

- 日本の重化学工業化により経済が大きく発展し、生活スタイルは急激に変化しました。
- 物流システムが発達し、周辺地域との生物資源循環システムは崩れてしまいました。
- 化石燃料を使った大量生産・大量消費の暮らしがはじまります。

暮らしの変化

- 名古屋市の食料自給率は、約1%（平成18年度）です。
- わたしたちが普段食べているものはすべて、市外で生産してもらっているといえます。

食料自給率

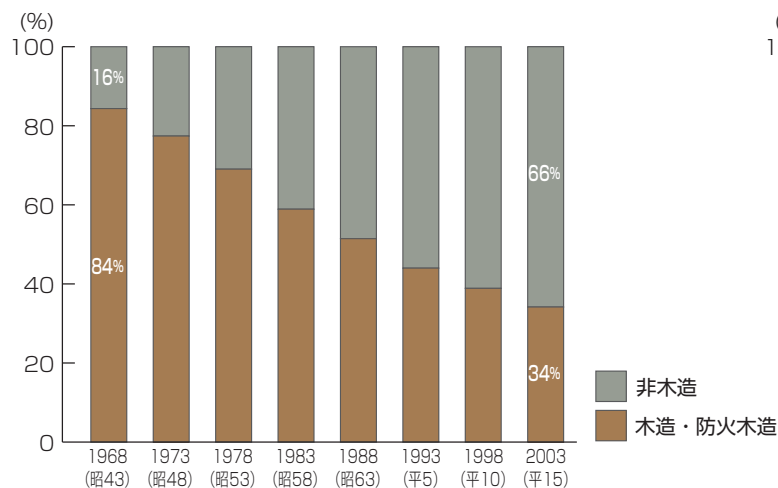


備考：食料自給率はカロリーベース、平成18年度の値

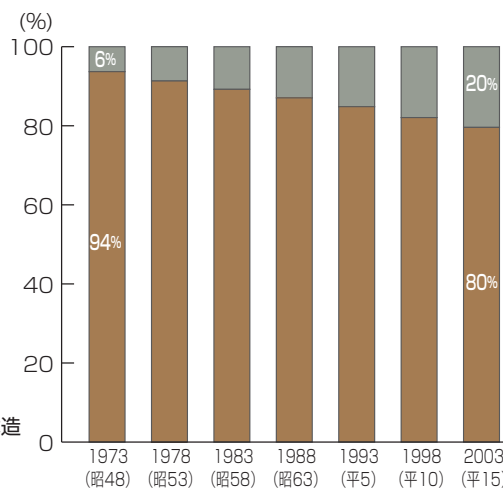
出典：日本及び愛知県は農林水産省資料、名古屋市は地域食料自給率試算ソフト（農林水産省ウェブサイト http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/zikyu04.html）より算出

- 木造の住宅は減少し、鉄骨・鉄筋コンクリートなど非木造の住宅が増加しています。
- マンションなど共同住宅の9割以上は非木造住宅で、一戸建ての住宅でも木造住宅の割合は減少しています。

構造別住宅数の割合



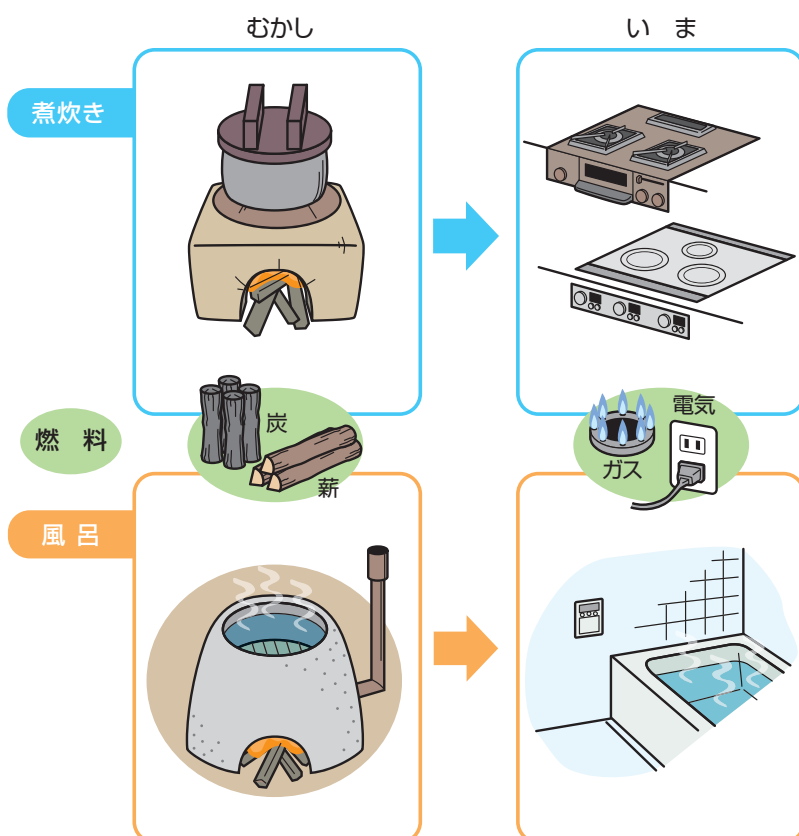
一戸建て住宅の構造別住宅数の割合



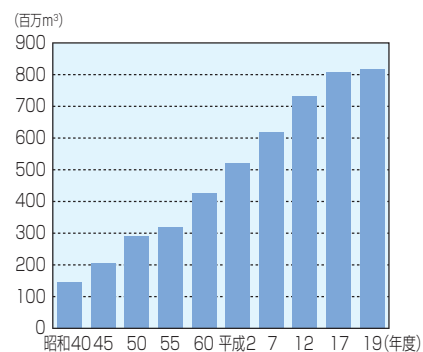
出典：名古屋の住宅・土地－平成15年住宅・土地統計調査結果－（名古屋市 平成17年）

生物資源から化石燃料へ

- 暮らしの中で使用する燃料は、炭や薪から、石油やガスなどの化石燃料へと大きく変わりました。
- ガスや電力の使用量は増加し続けています。

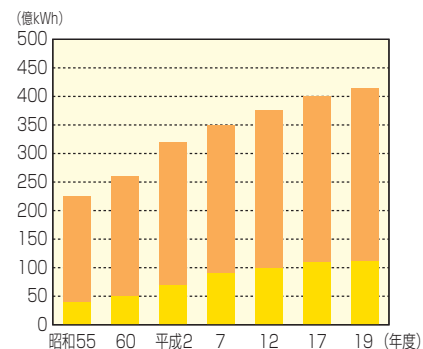


名古屋市内の都市ガス消費量の推移



出典：名古屋市統計年鑑等より作成

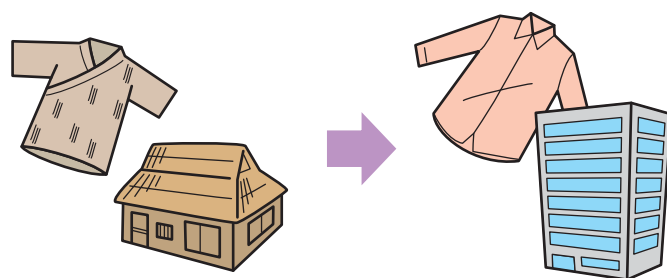
名古屋市内の販売電力量の推移



注：中部電力名古屋支店管内の数値

出典：名古屋市統計年鑑等より作成

- 衣料品の原料は、綿からナイロンやレーヨンなどの化学繊維に変わっていききました。
- アジア諸国から安い製品を大量に輸入するようになり、なごやでは伝統的な繊維や衣料品が生産されなくなっていました。



- 産業構造の変化にともない、伝統工業が衰退し、大量生産の時代になりました。
- 原料やエネルギーの海外への依存度が高まっていきました。
- 物やエネルギーを大量に消費することによって、豊かで快適な暮らしがもたらされましたが、風土にあった暮らしは姿を消していききました。

